〔研究ノート〕

生活支援技術「排泄介護」教授法の一考察
―実習後の記述より―

緒方　　都・長橋　幸恵・瀬　　志保・多田　鈴子

１．はじめに

介護福祉士教育は、尊厳やプライバシーを守り考えるという基本姿勢と基本技術を学生が習得でき、利用者の個別性に応じた応用を考え現場で実践できることが必要である。そこで授業や実習において排泄介助についてどのように思ったのか。また、どのように理解したのかの調査を行った。そこから、現状を把握する機会をもつことで、生活支援技術のなかの排泄介護の授業方法の改善を提案したものが本研究ノートである。

介護福祉士養成教育において厚生労働省は、資格取得時の到達目標11項目のなかに「他者に共感でき、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につける」こと、「あらゆる介護場面に共通する基礎的な介護の知識・技術を習得する」ことを挙げ、さらに、求められる介護福祉士像12項目のなかで「尊厳を支えるケアの実践」と「現場で必要とされる実践的能力」を挙げている。

本学では、2009年の介護福祉士養成新カリキュラム実施時より生活支援技術を10科目とし、排泄介護については「生活支援技術」科目のなかの１科目として１年生の後期に「生活支援技術５」として排泄の授業を行っている。基本技術や個別に対応する支援方法などの演習を中心に15講義（１講義90分）である。排泄についての解剖生理や疾患などについての講義は「こころとからだのしくみ」科目で５講義（１講義90分）実施している。介護実習は２年間に４期間とし、ＩＡとして６日間、ＩＢとして12日間、ＩＣとして17日間、Ⅱとして23日間の合計58日間である。身体介護を実施するのは主にＩＣとⅡでいずれも２年生の実習である。身体介護を多く実践する１ＣとⅡの実習後は排泄介助が難しいという声を多く聞く。

排泄は、食べることと同様に、人間が生きていくうえで、欠かすことができない行為である。また、自身が最後まで他人の手を借りたくない、出来る限り自分の手で行いたいと考え、自身の手でその行為を実施することが困難になったときには、生きていくことへの自信も喪失するなど、尊厳に関わる行為である。そして同時に、日本人にはその文化的背景として自分の排泄は人には見られたくないと考え、多くの人は他人に見せたことはない。そのため、そもそも他人の排泄状況・排泄物についての情報を持たない状況がある。においについても、平成生まれの学生たちには近年では水洗トイレの普及によりその環境は、現在の高齢者が生活していた時代とは違い、経験が少ないためか、苦痛と感じる学生もみられる。

本学の「生活支援技術５」のシラバスは次の通りである。

１、排泄の意義、目的と排泄行為の意味の理解
２、心地よい排泄のための環境と心身状況を体感
３、排泄リズム・排泄アセスメントの視点
４、自立に向けた排泄介護の実際（トイレ誘導）実技演習
５、自立に向けた排泄介護の実際（ポータブル）実技演習
６、自立に向けた排泄介護の実際（尿器、便器）実技演習
７、自立に向けた排泄介護の実際（おむつ）実技演習
８、排泄異常・排泄障害（失禁、便秘、下痢等）の理解
９、内部障害（腎機能障害、透析）の理解
10、内部障害（膀胱直腸機能障害、ストーマ）の理解
11、さまざまな排泄介護（浣腸、自己導尿、環境整備）
12、国家試験対策　排泄介助、演習のまとめ
13、認知機能が低下している利用者の排泄介護
14、グループ討議による排泄介護のまとめと発表
15、総括

２．調査概要

⑴ 目的

学生が排泄介助についてどのような考えを持っているのかを探り、授業においてその問題が解決できないか、また実践する上での授業との関連やその問題を考える。

⑵ 調査方法

「配票集合調査法」を用いて、研究に使用することを口頭で説明し了承を受けた。記名の自由記述アンケートとし、2016年10月11日に実施した。

⑶ 対象

２年生13人全員で、実習はＩＡ、ＩＢ、ＩＣの３回、35日間を終了している。

⑷ 回収率

100％であった。

⑸ 項目

①排泄介助をしたことがありますか。

②おむつ交換をしたことがありますか。

③実習で、排泄介助について感じたり考えたことを、できるだけたくさん書いてください。

④次の実習で排泄介助について心配なことを書いてください。

３．調査結果

①の「排泄介助をしたことがありますか」と、②の「おむつ交換をしたことがありますか」につ

いては、全員がどちらも経験済みであった。

③の結果を表１に示し、④の結果を表２に示す。

表１　設問１「実習で、排泄介助について感じたり考えたこと」

カテゴリー	記述内容
実習環境	・扉開けっ放しで、排泄介助をしていて良くないと思った。 ・ドアがあるのに開けっ放しでカーテンをつけてドアの代わりにしていた。 ・トイレの前で待ってもらう時間が長かった。 ・流れ作業のようにトイレの前の廊下に車椅子の方を並べる。 ・マスクは失礼だと言われた。 ・ひとりひとり手袋を代えてほしい。 ・バケツを持って介助に回る、バケツの中から便を拭いた後のタオルを探すのは、嫌。
実習環境 「記録」	・便の量のどれくらいが多くて少ないかが分からない。 ・便の量の基準が分からなかった。 ・排泄の記録が難しいと感じた。 ・○●△（－）が尿の量を表す。 ・職員が言っている「まる」の意味が分からない。
授業改善案 （授業環境） 「ここをこうして欲しい」	・授業で使用したおむつはサイズが合ってなさすぎた。 ・「おむつ交換習ってないの」と聞かれたので、もっと早くしたほうがいいと思う。 ・紙で拭き取る（スライム）練習がいると思う。 ・実際やるようなシチュエーションで演習がしたかった。
授業改善案 （授業内容） 「知っておきたかった技術」	・片手で利用者を支えておむつ交換する技術を学んでおきたかった。 ・足が拘縮している方など応用的なことを授業で習った方がいいと思う。 ・交換に抵抗を持っていて、暴れる人のおむつ交換にやり方がわからない。
「難しかった技術」	・ベッド上での麻痺の人のおむつ交換が難しかった。 ・片麻痺の利用者の二人介助は難しかった。 ・おむつ交換の体位変換などがすごく難しかった。 ・側臥位になれない人のおむつ交換が大変だった。 ・利用者の尿や便をふく力加減が難しかった。 ・立ちおむつをつけるのが難しかった。 ・おむつの位置が合わないので苦戦した。 ・量を観察して身体の状況もちゃんと確かめることがすごく難しいと思った。
「できなかった技術」	・手順を見て覚えた後に自分が実際にやると全くできなかった。 ・ひとりひとりの介助の手順が違うので分からなくなった。 ・拒否されながらやるのは初めてでやりにくかった。 ・あせって逆に失敗したりていねいにできなかった。 ・便がうまく取れなかったため時間がかかった。 ・陰部の洗浄まで、できなさすぎてつらかった。 ・安全で安心してもらうための支援をするための方法をとっさにできず大変だった。

「できなかった」気持ち	・利用者の立場に立てと言われても、緊張してしまって立場とか考えられなくなる。 ・緊張しすぎていて、学校で習った大切なことを忘れてしまった。 ・利用者の気持ちを考えながらしないといけないと言われていたが、正直介助するのに必死で利用者さんのことを考えながらはできなかった。 ・やることに精一杯で、利用者の気持ちまで考えるヒマはなかった。 ・プライバシーに気をつけてなるべく早く交換しようと思ったけど、時間がかかった。 ・自分の緊張でいっぱいになって「手際よく、すばやく、負担をかけずに」ということばかり考えていた。 ・介助される人の気持ちとかこまめな声かけを考えることができなかった。 ・どうすればいいのか全く分からなくてとても困った。
利用者に対する思い	・もっとキツくしてくれてエエよ、練習に使ってくれてエエで、とか言っていただき、ほんとうに有難かった。 ・申し訳ない気持ちでいっぱいになった。 ・「すみません」っていっぱい言っていた気がする。 ・きたないけどありがとうって言って下さるから良いのかな。
「できた」	・ほぼ毎日行っているなかで、わかるようになりひとりでできるようになった。 ・何回かさせてもらっているうちに、慣れてきてそこまで嫌と感じなくなった。 ・体調など出してくださったからわかることもある。 ・コミュニケーションを図りつつ落ち着いて介助を行うことを心がけた。
自身の気持ち	・正直嫌だったしやりたくなかった。 ・最初は汚い、やりたくないと思っていた。 ・少しは嫌な職だと思った。やめたいと思ったこともある。 ・介助途中はとても怖く、何度か気持ちと格闘した。 ・ちゃんと出来るのかがわからない。 ・ストレスたまった。
におい	・どうしたらにおいに慣れるのかを知りたい。 ・どうしてもにおいが気になってしまう。 ・においがするのはまだ介護になれていない証拠だと思う。 ・入ったらにおいを軽減したい。

表２　設問２「次の実習で排泄介助について心配なこと」

カテゴリー	記述内容
実習環境 （物・人）	・感染予防が心配。 ・「手袋しなくてもいいよ」と言われた時に「します」とはっきり言いづらい。 ・何も教えてくれなくていきなりおむつ交換してって言われたらどうしようかなと思う。 ・ほったらかしで「はい、やって」と言われそう。 ・文句を言われそう。 ・前回の実習でできているでしょうと思われそう。 ・その施設によって介助の仕方が違う。

技術ができない	・元気な利用者のトイレ誘導。 ・片麻痺の人のおむつ交換。 ・片麻痺の人のトイレ介助。 ・ポータブルトイレの支援方法が苦手。 ・応用的なことは全くしなかったので・・。 ・早くすばやく出来なかったらどうしようか心配。 ・すばやく交換することができない。 ・早く変えなきゃと思うと手順を間違えてしまって清潔を保てなくなる。 ・しっかりおむつやパットがあたっているか。 ・しわを作ったままにしてしまうことがよくある。 ・便のふきとり。 ・ちゃんと自分ひとりでできるか。
利用者に応じた介助	・抵抗を持っていて暴れる人のおむつ交換のやり方がわからない。 ・認知症の方の排泄介助で声かけや支援方法に工夫が必要そう。 ・認知症フロアでの排泄介助が不安。 ・介護度の高い利用者の介助をするのは少し怖い。
利用者からどう思われるか（プラス）	・利用者に不快感をあたえるのではないか。 ・早くしないと負担をかける。 ・プライバシーに配慮した介助ができるか不安。 ・自分のやり方が利用者の尊厳をそこねていないか少し心配。 ・相手に嫌な思いをさせてしまうのではないか。 ・きもち悪くないか。
利用者からどう思われるか（マイナス）	・上手くいかなくて利用者に怒られるのも嫌。 ・利用者にワーワーと思われそう。 ・利用者の排泄物が自分の服などについたときにどう反応したらいいのか。 ・まったく知らない人におむつ交換なんてして欲しいのか。
緊張	・とてもこわく緊張していたため手が震えてしまう。 ・緊張して利用者のことを一番に考えられない。 ・どうしても緊張してしまい次何をしていいかテンパってしまう。 ・いざ１人でやるとなると頭の中がまっしろになる。 ・慣れるまでが大変。 ・戻したりするからそれが心配
理由なく	・やろうって気にならない。 ・とりあえず全てが不安。 ・ぜんぶ心配。 ・実習嫌。 ・ストレス。

設問として「感じたこと、考えたこと」を聞いたが、記述の結果からは、「難しい」「できなかった」という言葉や、難しいと感じているという内容が多くみられた。また、排泄介護が難しいと捉えられている内容は多岐に渡っていた。

まず、「できなかった技術」についての多くはおむつ交換の内容である。技術として教えておいてほしかった（教えてもらっていなかったのでできなかった）、「できなかった」、あるいは「難しかった」と感じた、という発言は20/60（33.3%）であった。これは質問④回答（表２）の「次の実習への心配なこと」での「技術ができない心配」の発言の多さにもつながる。学生たちは基本的なこともで

きなかった原因として、緊張や焦り、技術の未熟さを挙げている。前述したように、介護の技術は、利用者の個別性を重視する必要があり、基本が通用しない現場で戸惑い焦り、利用者の気持ちを考えなくてはという余裕も失くしてしまう様子が窺える。

一方、「気持ちができなかった」と答えた内容では、学生は「利用者の気持ちを考える、羞恥心に配慮することができなかった」という介護の基本となる考え方を意識していて、それが実際の場面で「できなかった」という記述であった。質問④回答で「尊厳を損ねないか」「不快感を与えるのではないか」という記述ともつながる。

また、「できた」という内容の発言は、発言数としては、4/60（6.6％）であった。

さらに、実習環境に対して「ドアが開けっ放し」「カーテンが代わりに使われている」「廊下で待っている」などの意見が、7/60（11.6%）みられ、手袋着用に関する記述は④の回答にもみられる。

4．考察

現在は、生活支援技術のなかでの排泄介護の授業では、一般的な自立度に応じた介助方法とその原理原則を教えている。しかし、実習に行くと麻痺や拘縮などさまざまな身体状況の利用者の排泄場面と遭遇する。そこでは、授業で実施した技術が通用せず「できなかった」「難しい」と感じ、それは自信をも失う結果となる。基本の技術を学習したうえで、さまざまな利用者の状況についての対応方法を考えておくことは、不安を除き学生の自信や安心につながるのではないかと考える。今後は基本技術を習得したうえで、事前にその応用について考える機会を授業内で行う方法を考える。

教員は、学生が実習中に困ったのはどのような内容なのか、学生はどこができずに困ったのかを具体的に理解できていなかった。

そこで、学生が難しいと感じたさまざまな身体状況の利用者について「排泄」に焦点を当てて、学生が遭遇した事例を集め「事例集」を作成しようと考えている。

介護技術の方法は個別性が高く、施設によって方法も違っていたりする。そのことも、技術ができないという発言や応用力を問われて対応できないという気持ちに通ずると考えられる。技術は何度も繰り返し実践することで、上達するものであり、授業ではさまざまな利用者に対してどのように考えて対応するのかを考えることを重視している。

また、「利用者の生活意欲を高めるような生活支援技術を学ぶ」ことを目標の一つとしている実習ＩＣの後とⅡの前後に、難しかった事例や困った事例についての「事例集」を参考にしながら、技術面での振り返りの時間を持つような授業構成を考える。そこで、ロールプレイなどを使って場面や状況を学生みんなのなかで発表し個々に意見を出し合う機会を持つ。そのことは、次の実習への動機付けともなり、経験が活きる授業となるのではないであろうか。具体的な内容で、学生自身が検討し考える機会を持ち、「どうするのか」と方法を覚えるのでなく、「なぜそうするのか」と考える授業展開とする。そこでは答えを示すのでなく導く過程を考える授業方法も用いることを教員

は実践する必要がある。

そのためには、基礎知識と基礎技術が確実に定着していることが大前提として必要になる。看護技術の領域ではあるが、山口ら[1)]は基礎看護学における看護技術教育内容の精選のなかで「学生は『なぜそうするのか』ではなく『どうするのか』というその方法に目が向きがちであることもまた事実であった」とし「バリエーションを覚えることに懸命で原理・原則を読み取る、あるいは既習の原理・原則を応用するということが困難な様子が見受けられた」そこで「やはり、原理・原則から具体的・個別的な援助へという順序性をもって教授することを忘れてはならず、その基礎看護技術として教授すべき内容の本質を見失わないよう、どこにリアリティを求めるか、常に確認する必要がある」としている。介護においても同様だと考える。今回の自由記述においても「片手で利用者を支えておむつ交換する技術を知っておきたかった」や「側臥位になれない人のおむつ交換が大変だった」など、技術ができなかった、という意見からは「どうするのかという方法が知りたい」という様子が強く感じとれる。しかし、介護の基本となる個別性の対応には「なぜそうするのか」「なぜ違うのか」を考える必要がある。それを実践するためには、基本姿勢や考え方および基礎技術が正しく習得されていなければならず、原理・原則を疎かにしてはならない。

学生は「利用者の気持ちを考える、羞恥心に配慮することができなかった」という介護の基本となる考え方を意識していて、それが実際の場面で「できなかった」という思いが強くあったと考える。人見[2)]は「排泄ケアにおける羞恥心やプライバシーへの配慮を具現化することが、人間尊厳に関わる重要な要素として考えられる」としている。今回の記述の内容からは、学生たちの意識の中には、「こまめな声かけ」や「相手の立場に立つ」など、尊厳やプライバシーに配慮することは十分考え方や態度として根付いていて、それが声かけや利用者に対する表情などで具現化できなかった、「そうしたいのに、できなかった」という思いとして残ったと考える。その点などからも、尊厳を考える姿勢自体は、身についているものと思われる。

「難しい、できない」と考える背景として「できた」ことが評価されにくい現状もあると考える。さらに、そこには「できた」と言うと「ほんとうにできたの？」と問い返されそうに感じる環境があるのではないか。成果や結果を評価されると考えることで緊張感や焦りも生じ、さらに、どうすればいいのかわからなくなり、「できなかった」「難しかった」と感じてしまう。カンファレンスを反省会と呼ぶと、どうしても反省が主となってしまうように、「できた」ことが示される機会が少ないと自信も持ちにくい。そこで学生自身で「ここまでできた」「ここはできた」と、「できた」ことが確認できるような気づきシートの作成を行うこととする。

現在は学生の技術到達状況は、実習先に提出するファイルに日誌などとともに経験状況表として綴じているものがあるのみである（表３）。それは、排泄介助（自立支援の場合）、障害の程度に応じた排泄用具の選択・活用（ポータブルトイレ・尿器等）、排泄介助（おむつ交換・陰部洗浄）の３項目を、「見学△」、「指導者の指導のもとに実施○」、「指導者の監督のもとに学生のみで実施◎」、で記載することとした簡単なものである。

表３　本学、実習マニュアル2016年度、生活支援技術履修及び経験状況表より抜粋

技　術　項　目	学内経験	介護実習経験			
		ⅠA	ⅠB	ⅠC	Ⅱ
排泄介助(自立支援の場合)					
障害の程度に応じた排泄用具の選択･活用(ポータブルトイレ･尿器等)					
排泄介助(オムツ交換、陰部洗浄)					

介護実習経験:△見学　○指導者の指導のもとに実施(補助を含む)　◎指導者の監督のもとに学生のみで実施

これは、実習先での指導に活用されることを想定したもので、学生の到達感ややる気を刺激するものではない。自身の演習をチェックしながら、自信と到達感を得られる内容が一目で理解できるシートを授業内や実習中も使用することで、何ができた何ができなかったが自分自身で確認できる内容とした。学生の達成感と向上心を刺激し、応用力や考える力を伸ばし、答えを自らの力で引き出す応用力が介護福祉士の資質向上になる。

但し、学生の学内達成度や能力、一年時の経験内容の差異があり、このシートだけで捉えられない個人の能力もある。その点に関しては、「前回の実習で実施しているから」や「学内で○回も実施している」などがあるが、実習先では、基本から伝えていただけるよう、実習先との技術面での情報共有も重要である。

鈴木克明がインストラクショナルデザイン基礎資料のなかで「学生が主体的に学ぶためには教えないことが大切」であるとし、応用からの授業展開の大切さをのべている。答えを先に示さず、学生自らが考えながらいろいろな考え方や答えを身につける授業展開の方法である。利用者によってさまざまな援助の方法が考えられ、答えがひとつではない介護の授業に有効な方法であろうと考える。そのなかでも排泄の介護は、移乗・移動、着脱、清潔などの知識が総合されたものであり、本学ではそれらの授業を終えた１年生後期に排泄の介護技術の授業を実施している。さまざまな場面での基本技術の授業の方法として、今後、活用して行きたい。

さらに、プライバシーより効率が優先されていると感じ、尊厳やプライバシーに配慮することがなされていない状況を学生は考えている。また、手袋やマスクの使用についての記述などから、感染についての意識や清潔についての考え方などの基本的姿勢も身についている。

現在、本学の生活支援技術では、基本の技術をその原理・原則とともに教えていたが、それが学生にとっては、手順としてのみの理解となっていたかもしれない。そこで、学生は応用力が必要とされる場面に遭遇すると「そんなことは習っていない」や「教えておいてほしかった」という気持ちとなり、原理・原則を応用してそこから考える姿勢には至っていない。それは、利用者のことを理解していないうちは何もできないであろうと思い込んでいた、教員の問題でもある。どうすればよいかと考える力や、基本を身につけたうえで応用するためにどうすればよいかと答えを引き出す思考方法を身につけられる授業にまで至っていなかった。これらの結果を今後の課題とし解決策を考えたい。

5．展望

コマッタ・ハット報告

実習段階		実習施設名			
学科		学籍番号		記入者名	
記載日	年　　月　　日		担当教員		

※自分の行ったコマッタ・ハットを記入してください。
※図解や絵なども入れて具体的に記入してください。

1、利用者の紹介

2、どんな場所で？

3、コマッタ・ハットの状況は？

4、コマッタ・ハットの後、どのように対応したか？

＊コマッタ・ハットをして思ったことを自由に書いてください

図１　1)「コマッタ・ハット報告」用紙

コマッタ・ハット報告

実習段階		実習施設名			
学科		学籍番号		記入者名	
記載日	年　　月　　日		担当教員		

※自分の行ったコマッタ・ハットを記入してください。
※図解や絵なども入れて具体的に記入してください。

1、利用者の紹介
Ａさんは脳梗塞の後遺症で軽度の右麻痺がある。
移動は車椅子を使用しているが、自分で移乗できる。
排泄についてはリハビリパンツを使用しているが、日中はトイレで排泄している。

2、どんな場所で？
Ａさんの居室のベッドサイド

3、コマッタ・ハットの状況は？
午後３時頃に訪室すると、Ａさんがベッド脇に立っていてズボンが便で汚染していて、どうしたらよいか分からなかった。

4、コマッタ・ハットの後、どのように対応したか？
「少し、待っていて下さいね。」と利用者の方にお伝えし、職員を呼びに行って、状況を伝えた。

＊コマッタ・ハットをして思ったことを自由に書いてください

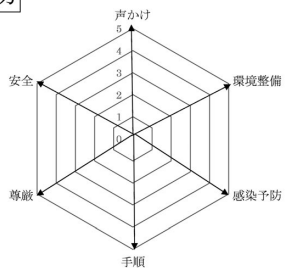
図１　2)「コマッタ・ハット報告」記入例

1）考察で挙げた「事例集」を「コマッタ・ハット報告」と名づける（図１）。

現在、２年生の前期に生活支援技術の総まとめの科目として位置付けている科目に「生活支援技術８」がある。そこで、この「コマッタ・ハット報告」を活用し、学生の情報として共有するだけでなく、技術面での振り返りの時間を持つような授業構成を考え、ロールプレイなども使って場面や状況を学生みんなのなかで発表し、個々に意見を出し合い学ぶ機会とする。

「コマッタ・ハット報告」に基づいた内容に授業で触れておくことで、実習中にもその内容を確認することができ、「あったな」とより身近になる。そのうえで事前学習を基に、いろいろな方法を考え、今後の状況を予測することもできる。「できなかった」ということが悪いことなのではなく、「できなかった」ことは、利用者に応じた方法やさまざまな考え方を学ぶことの基礎となる。また、他の学生も難しいと感じたのだ、と知ることも自信を失わずに済むことにつながるのではないかと考える。

排泄介助

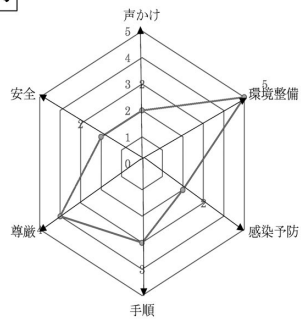


《内容》

項目	できたこと	できなかったこと
声かけ		
環境整備		
感染予防		
手順		
尊厳		
安全		

図２　１)「気づきシート」用紙

排泄介助



《内容》おむつ交換

項目	できたこと	できなかったこと
声かけ	介助後の声かけができた	介助中の適切な声かけができなかった
環境整備	介助後、換気した	
感染予防	手袋をきちんと装着した	おむつを床に置いてしまった
手順	準備できた	介助途中でおむつの前後が分からなくなった
尊厳	プライベートカーテンを閉めた	時間が掛かりすぎた
安全	側臥位の際、手すりを持ってもらえた	手すりを介助中外して、介助後戻すのを忘れかけた

図２　２)「気づきシート」記入例

２）気づきシートは、自身の成長を見える化する。そこには見るべきポイントも加え、ポイントごとにどうだったのかを確認しながら学ぶことができるようにする。学生の達成感と向上心を刺激し、応用力や考える力を伸ばし、答えを自ら引き出すことが、介護福祉士の資質向上になると考える。

特筆したい点として、アンケート結果の分析から排泄介護において介護福祉士として、尊厳やプライバシーを守り考えるという基本姿勢と基本技術を学生が習得し、利用者の個別性に応じた応用を考え現場で実践することの難しさと、それを教える難しさを改めて感じた。「コマッタ・ハット報告」と「気づきシート」とを活用し、より考える姿勢や基本から応用への力が育つ授業内容を考え今後の課題としたい。さらに、他の「生活支援技術」や「こころとからだのしくみ」などの授業との関連や関係性を踏まえた授業展開も課題である。

謝辞

調査に協力いただいた本学学生のみなさまに感謝申し上げます。また、本研究は2014年度個人研究費の助成により取り組むことができました。ご配慮いただきました理事長先生、学長先生はじめ、ご指導賜りました先生方に深く感謝申し上げます。

引用文献

1）山口さおり，今村圭子他．基礎看護学領域における看護技術の教育内容の精選．鹿児島大学医学部保健学科紀要26，p.83-91，2016.

2）人見優子．羞恥心に関する介護学生の意識変化についての一考察．共栄学園短期大学研究紀要，第25号，p.91-110，2009.

参考文献

・鈴木克明．平成28年度全国教職員研修会．講演資料「より良い授業を目指して～教師は授業のデザイナー～」．2016/10/26-27.

・介護福祉士養成講座編集委員会編集．生活支援技術Ⅱ．中央法規，2014，（新・介護福祉士養成講座，７）．

・川井太加子編集．生活支援技術Ⅱ，改訂版．メヂカルフレンド社，2015平成26年，（最新介護福祉全書，６）．

・介護福祉士養成講座編集委員会編集．介護の基本Ⅱ．中央法規，2015，（新・介護福祉士養成講座，４）．

・厚生労働省．「平成19年法改正をふまえた、介護福祉士養成課程における介護技術に関する教育について」http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kinkyukoyou/suisinteam/TF/kaigo_dai3/siryou2.pdf，（参照2016-12-10）．

（おがた みやこ：講師）

（ながはし さちえ：講師）

（せ しほ：講師）

（ただ れいこ：講師）